

2. MMPI からみた Duchenne 型 筋ジストロフィー者の心理特性

心理部会（部会長：河野 慶三）
全国国立筋ジストロフィー児（者）
収容施設児童指導員協議会
（会長：浅倉 次男）

日常的な care の過程で、筋ジストロフィー者の心理状態の変化を確実に把握することだけでもそう容易ではないが、それを一定の形で記録に残していくことはさらに困難な作業に属する。その方法として、MMPI（Minnesota Multiphasic Personality Inventory）が有用であることはすでに報告したとおりである。

しかし、mass としてみた場合、筋ジストロフィー者の通常の心理状態が、MMPI にどのように表現されるかという点については、対象症例が少ないこともあって、いまだに一定の結論を得ていない。

そこで今回は、多数例を対象として、MMPI からみた筋ジストロフィー者の心理特性につき検討することにした。

〔対象と方法〕

対象は、八雲病院、岩木療養所、西多賀病院、下志津病院、東埼玉病院、新潟療養所、医王病院、長良病院、鈴鹿病院、西奈良病院、宇多野病院、兵庫中央病院、松江病院、西別府病院、再春病院、南九州病院の16の国立療養所に入院中の15歳以上の Duchenne 型筋ジストロフィー男子 166 例である。対象者の年齢構成は、15歳21例、16歳32例、17歳24例、18歳19例、19歳26例、20歳20例、21～27歳24例となっている。質問の文章を十分に理解できないと判断される症例は、この対象者の中には含まれていない。

MMPI の検査は、三京房（京都）から市販されているカード式検査法を用いた。検査時間は特に限定せず、身体状況などを配慮して2日間にわけて実施した例もある。

対照として、健常中・高校生男子 181例にMMPI 検査を行なったが、validity scale の？の得点が99以上の17例（9.4%）は集計から除外した。その結果、対照群は164例となった。対照群の年齢構成は、15歳38例、16歳63例、17歳63例である。

対照群の検査は、冊子式により光読式マークシートに記入させたものを、東洋電子計算センター岡山市のコンピューターで処理した。したがって、厳密な意味では正確な対照群とはなっていないが、多数例を同時にカード式で検査することは実際上不可能であるので、やむをえないものと考えた。

【結 果】

1. Duchenne 型筋ジストロフィー者のMMPI 平均プロフィール

Duchenne 型筋ジストロフィー者のMMPI 平均プロフィールは、図1のとおりである。

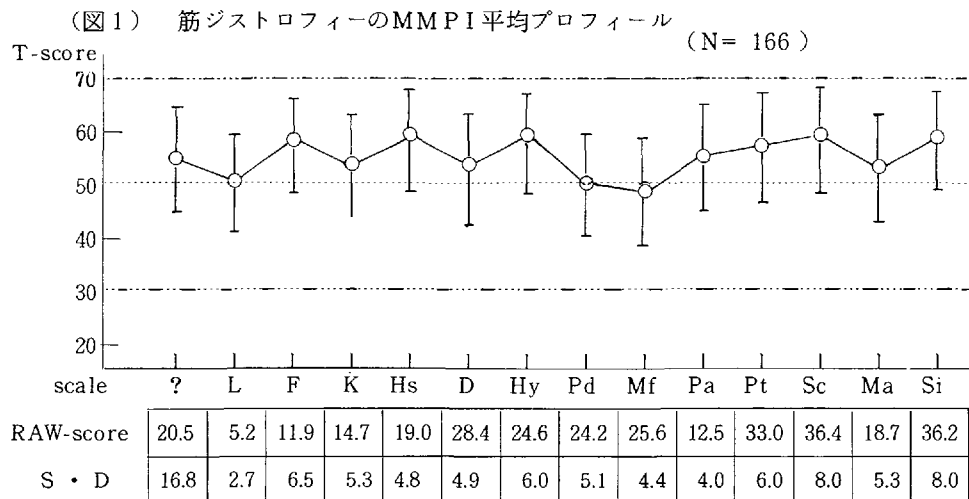


図1の下段には、各項目ごとの修正粗点平均値 (raw score) とその標準偏差 (S D) を示した。

修正粗点平均値から求めた T-score は、Mfを除いてすべて50以上となっていた。日本版MMPI の標準化に用いられた 1,006例 (男 560、女 446)の結果⁴⁾と比較してみると、validity scale では、?、F、Kの3項目の得点が、筋ジストロフィー群で有意に高くなっていた ($P < 0.005$)。つぎに、clinical scale をみると、Hs、Hy、Pt、Sc、Si の5項目は危険率0.5% D、Pa の2項目は危険率5%で有意に筋ジストロフィー群の得点が高かった。Pd、Ma の2項目には差がみられなかったが、Mf は5%の危険率で筋ジストロフィー群が有意に低くなっていた。

粗点の平均値を詳しく検討すると、得点の分布のしかたには上記のような有意の差がみられるが、各項目の平均値そのものは、すべて標準化対象群の平均値 ± 1 S Dの中に入っていた。

2. 年齢別修正粗点平均値の比較

筋ジストロフィー者の年齢別に各項目ごとの修正粗点平均値をもとめ、一覧表にしたのが表1である。

(表1) 筋ジストロフィー者の年齢別修正粗点平均値

Age (N)	Validity scale				Clinical scale									
	?	L	F	K	Hs	D	Hy	Pd	Mf	Pa	Pt	Sc	Ma	Si
15 (21)	28.8±20.5	5.4±2.5	13.7±9.5	15.1±4.5	18.2±6.4	26.8±3.1	22.9±7.8	24.1±5.5	23.9±5.3	12.9±5.7	31.8±5.7	35.8±11.0	18.6±5.5	34.0±7.3
16 (32)	19.4±17.9	6.5±2.4	11.2±6.4	14.3±4.6	18.9±5.0	29.3±4.4	25.5±6.1	24.5±5.3	25.6±3.7	12.2±3.9	33.4±5.9	36.1±7.1	18.4±4.0	37.4±6.9
17 (24)	20.5±17.1	5.2±2.7	13.5±6.9	14.5±5.6	19.2±4.4	29.3±5.8	25.6±5.3	25.5±5.8	25.3±4.5	13.0±5.1	34.9±6.4	38.0±8.9	20.3±6.6	38.5±8.2
18 (19)	13.2±11.6	5.4±2.0	9.6±4.1	16.5±5.6	19.8±3.4	27.6±5.1	24.2±6.5	23.7±5.6	26.6±3.6	11.9±4.3	32.8±5.5	35.4±7.4	18.6±6.6	33.7±6.4
19 (26)	22.7±16.1	4.9±2.4	13.0±5.3	14.0±4.8	19.1±3.8	28.2±4.5	23.6±4.0	22.0±3.8	25.0±4.5	12.2±3.5	33.1±6.5	37.3±7.2	18.4±5.5	37.4±6.4
20 (20)	15.6±14.4	4.7±3.0	11.8±6.0	14.1±5.7	19.3±4.8	27.7±6.3	25.0±6.3	25.8±3.4	27.3±4.2	13.0±4.2	32.5±5.8	36.6±6.2	19.6±4.6	36.2±9.1
21~ (24)	22.2±12.9	5.3±3.5	10.3±4.7	14.9±5.8	19.0±5.4	29.0±5.0	24.7±6.3	24.0±5.4	27.0±4.8	12.2±3.1	32.5±5.5	35.4±7.3	17.1±3.9	35.0±10.1

Validity scale をみると、? の得点が 13.2 ~ 28.8 の間に分布しており、年齢による差が大きい。F は 9.6 ~ 13.7 で ? について差が大きい。?、F とともに年齢群間には有意差は認められなかった ($P > 0.05$)。L、K の場合には、差はほとんどなかった。

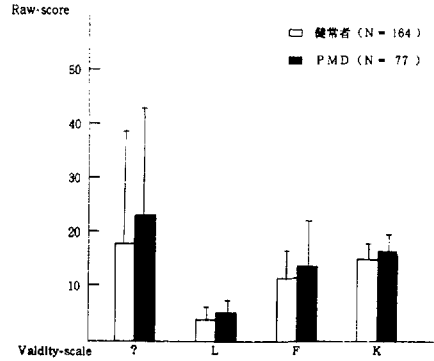
Clinical scale では Si の項目の平均値が 33.7 ~ 38.5 の間に分布しており、その差がもっとも大きかったが有意ではなかった ($P > 0.05$)、その他の項目には、年齢群による差はみられなかった。

したがって、少なくとも今回の対象者の場合は、年齢による MMPI プロファイルの変化はないものと判断した。

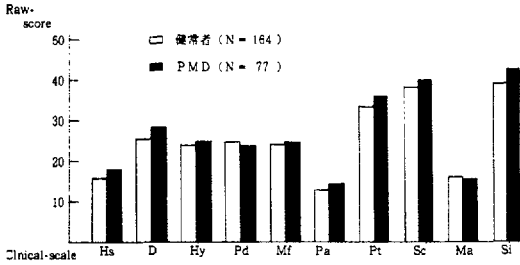
3. 15~17歳の同年健常者との比較

すでに述べたとおり、筋ジストロフィー群では、年齢による MMPI プロファイルの差はないので、対照である健常者と同一年令の 15~17歳の筋ジストロフィー者 77例の修正粗点平均値を再度算出し、健常対照者 164例の平均値と比較した (図 2、3)。

(図2) 15~17歳の筋ジストロフィーと同年令健常者の
MMPI 粗点平均値の比較



(図3) 15~17歳の筋ジストロフィー者と同年令健常者の
MMPI 粗点平均値の比較



Validity scale では、L、F、Kとも筋ジストロフィー群の粗点が高かったが、有意差がみられたのはFのみであった ($P < 0.05$)。一方、clinical scale では、D、Si が 0.5 %、Hs は 1 %、Sc は 5 % の危険率で筋ジストロフィー群の粗点平均値が有意に高くなっていった。

標準化対象群との比較では有意差のみられたK、Hy、Mf、Pa、Ptの5項目で、筋ジストロフィー群は、この同一年令健常者群との間に差がなかったことになる。

つぎに、両群の各項目ごとの T-score 70以上の異常値出現頻度をみると、表2のごとくである。

(表2) 15~17歳の筋ジストロフィー者と同年令健常者の異常出現頻度の比較

	?	L	F	K						
筋ジストロフィー群 N = 77 (%)	4 (5.2)	2 (2.6)	13 (16.9)	6 (7.8)						
対 照 群 N = 164 (%)	17 (10.4)	3 (1.8)	21 (12.9)	0 (0)						
	Hs	D	Hy	Pd	Mf	Pa	Pt	Sc	Ma	Si
筋ジストロフィー群 N = 77	10 (13.0)	3 (3.9)	9 (11.7)	7 (9.1)	0 (0)	7 (9.1)	6 (7.8)	9 (11.7)	7 (9.1)	1 (1.3)
対 照 群 N = 164	7 (4.3)	6 (3.7)	11 (6.7)	7 (4.3)	3 (1.8)	7 (4.3)	11 (6.7)	15 (9.1)	10 (6.1)	4 (2.4)

Validity scale では、筋ジストロフィー群の異常出現頻度は、高い順に F、K、L であり、健常者群では、F、L の順で、K の異常は出現しなかった。筋ジストロフィー群では、K の異常が 6 例（7.8%）に認められたことが注目される。Clinical scale をみると、全体に筋ジストロフィーの異常出現頻度が高い傾向がみられた。筋ジストロフィー群では、Hs 10 例（13.0%）Hy、Sc 各 9 例（9.1%）の順であったが、健常者群に比べ Hs の異常出現頻度の高いことが特徴であった。筋ジストロフィー群の Hs は、平均値の比較でも有意に高くなっており、彼らの身体への意識の固着が強いことを示していた。

〔考 察〕

15歳以上の Duchenne 型筋ジストロフィー者 166 例の MMPI 平均プロフィールを分析した結果は、

- ① 質問の文章そのものの理解や、質問されている状況の把握が十分でない例が明らかに多く検査に対して防衛的な姿勢がみられる。（Validity scale の F、K の高値）
- ② 自己の身体状況への意識の固着があり、内向的、非活動的、非現実的な気分になりやすい傾向がある。（HS、Si、Pt、Sc の高値）
- ③ 気分がかわりやすく、心的短絡現象が生じやすい。（Hy の高値）

の 3 点に要約することができるが、神経症・うつ病・性格異常などの疾患群でみられる、平均値の T-score そのものが 70 を越えるという形の極端な偏り（4, 5）ではないことも付言しておくべきであろう。

上記の結果は、MMPI 標準化対象者との比較により得られたものであるが、筋ジストロフィー群 166 例中 142 例（85.5%）は 15～20 歳の若年者であるので、年齢要因の関与も考慮しておく必要がある。

この点については、対照群の年齢との関係で、15～17 歳の症例のみを対象とし、平均プロフィール及び T-score 70 以上の異常出現頻度の両面から比較検討した。

その結果、validity scale に関しては特にかわりはなかったが、clinical scale では、Hy は対照群との間に差がなくなり、既述の分析結果③は年齢要因の反映と判断された。また、同一年齢健常者に比べて、筋ジストロフィー者はより抑うつ的であることも明らかになった。

この共同研究は、別表に示した 33 人の児童指導員・心理判定員・医師の協力のもとに行なわれたものである。

文 献

- 1) 河野慶三、野尻久雄：厚生省心身障害研究、進行性筋ジストロフィー症の成因と治療に関する臨床的研究、昭和 49 年度研究成果報告書、PP, 46—48
- 2) 河野慶三、片山幾代、野尻久雄、宮崎光弘：同 昭和 50 年度研究成果報告書、PP, 97—104
- 3) 河野慶三：筋ジストロフィー者の心理特性とその care、国立療養所鈴鹿病院、鈴鹿、1976 PP, 24—28

- 4) 日本MMPI 研究会編：日本版MMPI、ハンドブック、増補版、三京房、京都、1973
 5) 河野慶三：治療、58：975 - 985、1976

(別表) 共同研究者一覧

国立療養所八雲病院	桜田 裕, 藤島慎一, 大友政明
国立岩木療養所	小野史生, 佐藤 勇
国立療養所西多賀病院	藤井啓子, 菅原 進, 菅井武夫, 浅倉次男, 菊地正彦
国立療養所下志津病院	関谷智子, 村上純子, 堀米田鶴子
国立療養所東埼玉病院	渋谷 斌, 林 良枝, 山川和正
国立新潟療養所	亀井俊治,
国立療養所医王病院	正木不二磨
国立療養所長良病院	丸尾正志
国立療養所鈴鹿病院	片山幾代, 野尻久雄, 宮崎光弘, 河野慶三
国立療養所西奈良病院	前田和典
国立療養所宇多野病院	中西 孝
国立療養所兵庫中央病院	高井恒夫
国立療養所松江病院	黒田憲二
国立療養所西別府病院	吉良陽子, 寺田真弓
国立療養所再春病院	石本由紀男, 末竹寛子
国立療養所南九州病院	杉田 祥子, 西村喜文

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

日常的な care の過程で、筋ジストロフィー者の心理状態の変化を確実に把握することだけでもそう容易ではないが、それを一定の形で記録に残していくことはさらに困難な作業に属する。その一方法として、MMPI(Minnesota Multiphasic Personality Inventory)が有用であることはすでに報告したとおりである。

しかし、mass としてみた場合、筋ジストロフィー者の通常の心理状態が、MMPI にどのように表現されるかという点については、対象症例が少ないこともあって、いまだに一定の結論を得ていない。